
誓約異端

桃月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

誓約異端

【Zコード】

Z7903B

【作者名】

桃月

【あらすじ】

2004年、突如世界に出現した紅い境界線。その境界線に引かれた世界は二つに分けられ、境界線の向こう側の人々は「異端」を身につけてしまう。だが、同時にその対価として大切なモノを失ってしまう事に……。彼方もその「異端」の者達の一人。「ボクは今でも君の笑顔を思い出せない」

epo プロローグ

3年前、あの蒸し暑い夏の日の夜に突如、世界に浮き上がった紅い境界線。

世界は一つに分けられ、境界線の向こう側の人達は「異端」と言う能力を身につけてしまつ。

だが、「異端」を得ると同時にその対価として、その者の最も大切なモノを奪われてしまつ。

向こう側にいたボクも、もちろん「異端」を手に入れ、同時に最も大切な人を失つた。

ボクは……。

ボクは今でも、3年前に消えた君の笑顔が思い出せない。

これはきっと、ボクへの罰なんだと思う

ep1 フラッシュロードの呪い

あの時の事を思い出していた。3年前、あまり詳しくは思い出さない。

だつて、大切な人が失った記憶だつたから。

空一杯に広がっていた星空。

辺り一面の綺麗な花畠。

そこには彼女がいて、それが当たり前のようになつて続していくと信じていた。

まだ、ボク：方枷　彼方が13歳の時だ

地面から、突如浮き上がった紅の線。

それはまさに人の血の色をしていて、だから余計に気味が悪かった。

だけど……見ているだけで、魅入られてしまつ。奇妙な感覚。

紅の線を踏み超えようと一步…また一步と足を進める。

そして、遂にその線を超えた。

線を越え終わった後・・・。

なんだか、急に体に違和感が走った。

今考えると、その時にボクが「異端」能力を手に入れたからだったんだろう。

だが、それと同時に傍にいた彼女が……消えてしまった。

それが最大のボクへの罪。

好奇心に駆られて、悪魔のような線を踏み入れてしまつたボクへの

……最大級の罪悪。

これはボク“だけ”ではなく、世界の人々を巻き込んだ。

そう、線の向こう側へ踏み越えたモノへ“最高の力”を『え、“最高の贊”を引き渡す取引を。

異端者になつた者達の存在は世界では極秘とされ、一般市民には“ただの事件”という事になり、詳細はうやむやになつた。

だけど、被害は共通で・・・・・。

この紅の線は後の世界で「ブラッドロード」と呼ばれる事となる。

日本にいたボクにとっては、人生最悪の真夏の一寸で、絶対に忘れることのできない記憶ともなった。

あれから、もう3年が建つ。

癒えない傷を残して、世界はまた以前の通り、元に戻った。
異端者達と消えないブラックドローードだけを残して・・・。

眠くなるような授業に目を瞑る。
前では先生が、難しい数式を書いていた。

「……方枷、やってみろ!」

ボクの名前が出る。

なんでボク?

毎回、この先生の授業にボクばかり当てられているのはもう何かの
生徒イジメとしか思えないな……。

まあ、寝ているから問題を当てられるのは当然なんだが。
授業の内容を聞いていないボクには絶対にわかる訳ない。

「はあ~」

うつ伏せていたボクは皆の視線が集まる中、教卓へと向かった。
黒板にはさつきも言つたが、まったくわからない数式が書かれていた。

る。

だけど、 “ 今のボク ” にはこれが手に取るよりにわかつていた。

「 $x = 2a$ ですか？」

「 正解だ！」

先生は意表をつかれたような顔をしていて、

他の生徒も皆ボクに驚いていた。

毎回、この光景を見てしまつと流石に飽きてしまつよな。

さつきの事なんだが.....。

ボクは反則をしている。

さつき、教卓へ向かう途中で「誓約を誓つ」と小声で囁つた。

これがボクの “ 異端 ” の発動キー。

ボクの異端：“ 誓約誓誕 ” は「物理法則に従つた事を誓約でき、その誓約下の中でボクへと誓約内容を与える」といった能力である。だけど、物理法則に従わなければいけないので、「生物を生き返らせる」等はもちろんできない。

ボクの出した答えの正解と共に、授業の終わりのチャイムが鳴る。

「起立！..... 礼」

6時間目の授業は終わり、これでやっと帰れると思つと楽な気持ちになれた。

まあ、簡単に言えば学校 자체がかつたるい。

そう、ボクはなんでもかんでもかつたるいと片付けてしまひ、極度のめんどくさがりだ。

自分で言うのもなんだが、これだけは誰にも負けないと意地を張れる。

もちろん、無意味な意地だが。

「方枷君、さつきは凄かつたね〜！」

神代学園一の美人でボクのクラスメイトでもある藍口 碧が話しかけてきた。

「ああ、そつか？」

「うん〜……だって、寝ていたのに答えをすぐに書けるのって方枷君くらいしかいないし」

「あー……」

まあ、あんな事は一般の人にはできないな、確かに。
藍口はその綺麗な小顔をボクの方へと近づける。

相変わらずの可愛い顔に普通の男なら思わず、ドキッとしてしまうだろう。

しかし、ボクはそんなどこかのラブコメの主人公みたいな奴ではないので、絶対にそんな事はならない……多分。

「私も方枷君みたいな“天才少年”になりたいな〜」

「それを言うなら、藍口の場合、天才少女だろ・・・? それにボクは天才じゃないし、藍口の方こそ今のままで十分だと思うけど

？」

「私はあんな風に寝ていた時に問題を当てられたても、アニメみたいに、パツと答えられる人になりたいの！」

「…無理、無理。あれはボクだけの技だつて」

「むうーー」

藍口は膨れた顔になつて、ボクの頭をぽかぽか叩く。この藍口の攻撃、実は地味に痛いんだよな…。

と、ここでボク達の担任の美咲先生が教室に入つてきた。

「皆、席について。終礼を始めるわよ」

後ろで頭を叩いていた藍口も先生が来たことで諦めて自分の席へと座る。

藍口からの攻撃から助かったボクは、嘆息をして、教室の窓から空を見る。

天気が悪かったせいなのか、少し暗くなつていて、夕日はもう沈んでいた。

無事に終礼を済ませた後、ボクはいつものように藍口と一緒に帰宅していた。

まあ、学校を出るまでは彼女のファンクラブ（神代学園では藍口さ

ん同好会と言つフア ンクラブらしきモノが存在している。もちろんながら、同好会は男の比率が100%でそのメンバーが全員むさ苦しい奴等ばかりだ。）の方々のギスギスとした殺氣のこもつた視線が背中に何本も刺さつていたが…。

それについてはスルーの対処でいいつ。

「ねえ、方枷君」

藍口の足が止まり、ボクもそれに合わせて止まる。

「なんだ？」

「方枷君つてや…。ブラッドロードの“呪い”つて噂、知ってる？」

「……いや、知らないな」

「そつかあ～。…ブラッドロードの“呪い”つて言つのはね、紅い線に繋がれてしまった人が、その線から逃げられなくなる話なんだよ」

「……タチの悪い噂だね」

「でもね・・・。」これは噂なんかじゃなくて、実際に起つた事なんだと私には思うんだ。だって、それでもなきや、こんな噂話流れないし……」

「でも、噂は噂だろ？」

「…方枷君つて夢がないな～」

藍口は田をきらきらさせながら、子供のようにな話した。
その話を聞いたボクは、複雑な思いだった。

皮肉にも確かにブラックドロードの“呪い”はある。
藍口が言つてゐる事とはまったく別物なのだが。
異端者。一般の人には絶対に知られていない者達。
ボクもその中の一人、そして“呪い”という名の罪を受けた者だ。
そして、呪いは今も僕達に残つてゐる。
消えない痛みと共に……。

「……方枷君？」

藍口の呼び声にハッとする。

「あ、ああ……。」めん

「別に私はいいけど、方枷君大丈夫？：なんか顔色が青ざめている
よ？」

そう言わると、今の自分の状態はそんな感じだと思える。

「大丈夫だよ」

ボクは藍口に心配させないように、無理に元気な顔を作つた。

「……うん。なら、いいんだけど……」

「よし、早く帰つて今日は寝るよー多分、田頃から勉強のしすぎで
貧血でも起つたと思つ」

「そりなんだー……って、方枷君、勉強なんてしてないじゃん！」

「ボクのボケに〇・5秒で突っ込むとは……流石だな、藍口ー。」

「…………もおーーー心配したこいつが馬鹿だつたようー」

またさつきの、終礼前の時の会話になつてホツとする。
ボクはまた膨れた藍口に頭をぽかぽか叩かれながら、道端を歩き始めた。

今的生活は本当に悪くなくて……、むしろ心地いい。
だけどもし、“裏のボク”の顔を表の顔を知つている誰かが知つてしまつたなら、それは大きな裏切りとなつてしまつだらう。
だから、夜が来るまでは、ずっと楽しいこの日常を。

けど、夜が訪れてしまつとボクは

この小説を見ていただき、ありがとうございます。

良い点、悪い点等多彩な感想を書いてもらえたと嬉しいです。（感想くれえ―――― www）

一応、時間があれば更新し続けていくのによろしくお願ひします（てか本文を見てやってください www (えツ www)

そして、一話をようやく完成させた所であえて言ひますが……。

この話はぶっちゃけラブコメに……、は――嘘です www (すみません (汗))

まあ、冗談はさておいて。

2話からは彼方の夜の顔……つまりは“裏の顔”を書いていきます。

まあ、ダークファンタジー？（てか、アクション物なのかな？）系なんですね。

といふか、桃月はこのファンタジー系を書くのはもしかしたら初めてになるかもしれません――

なので、「ほんのファンタジーじゃない」等は大目に見てやってください (汗)

では、また一話のあとがきで会いましょうw

ヾ(*。^*)ノ see you next time ! !

ep2 ダブルフェイス

「今夜の月は……本当に曇りもなくて綺麗だな」

市街の中でも、大きいビルの屋上に、ボクは立っていた。

「何故、こんなところにいるのか……？」と聞かれてしまつと、説明をする気はないのだが、やっぱり答えづらい。

外は案外寒くなくて、少し厚着だつたボクは黒い上着を脱いで、腰に巻きつけている。

< heresy、現在の位置を確認したい。応答してくれ>
腰に吊るしておいた無線機から、女性の綺麗な声が流れてきた。
heresyと呼ばれたのはボク。
そう、“今のボク”は方枷、彼方ではなく、heresyと呼ばれている。

「 いらっしゃり、heresy。現在は市街のセンタービル屋上で待機中」

<了解した。ターゲットが動き始めたら、また連絡を入れる>

そう言つて、相手は無線を遮断する。
ボクはと言つと…。

無線の内容なんかは、どうでもいいようなぐらいい、綺麗な月を見ていた。

そう言えれば、“彼女”が消えた夜もこんな綺麗な月だったよつの気がする。

曇り無き空の上には、たくさん星と真っ白な月で飾られていた。あの悲惨な出来事が、まるで嘘だつたよつな……、そんな印象がボクに残されていた。

「……わかった」
heres、ターゲットが間もなく動き出す。すぐに行動できるよつに備えてくれ

ボクは空を見るのをやめて、地上を見下す。
ざわめく回廊は人々で満たされて、ボクがこれから行つ事など、その光景を見たら、嘘みたいなよつで。
もし、キミが生きていて、ボクがこんな事をしているのをキミが知つたら……。
多分、泣くんだらうな……と思つ。

「捕らえられて、たまるかつてー」

男はそつ咳きながら、この暗い夜道を走つていた。

汗でびっしょりの顔で、手には大きなトランクケースを持って、何から逃げているようだ。

タン、タン

後ろから、2、3人くらいの足跡が聞こえてくるが、男は振り向かない。

多分、そんな余裕はないのだろう。

流れしていく汗を気にせず、ただひたすら、逃げる事だけを考えていた。

前には一つの小道で別れていて、男は右の道へと走りぬける。

そして、その道に置かれていた汚いゴミ箱の中に隠れて、やり過ごす事を決めた。

追いかけてくる足跡はさつきの一いつに別れた小道辺りで止まる。

「奴はどうちへ言つた！？」

「わからない。俺は左の道を探すから、お前達は右の方をあたつてくれ

「わかつた！」

追いかけてくる者達は二手に別れて、男を追つた。

もちろん、男はゴミ箱に身を潜めて、その話を聞いている。

追跡者達の足跡がだんだんと遠くなつていいくのを確認して、男は外へと出た。

服にはゴミ箱に隠れていただけの事はあって、物凄い汚物が体中についていた。

「……どうやら上手く成功したみたいだな」

男はさきつしりと手にしたトランクケースを見て、ニヤリと笑った。
「こいつがあれば……“国一つだって墮とせる”。確かにそうアイツ
が言つていたな」

来た道を引き返しながら、男は欲望で駆られていた。

男はまだ、トランクケースの中身を見てはいないのだ。

依頼者は“決して見るな”と言つていたが、“国一つだって墮とせ
る”と聞くと、どうしても覗きたくなつてしまつ。

「俺が盗んだんだ。少しくらいは見てもバチは当たらねえ
よな」

そう言つて、男はトランクケースの中身を開けようとした。
その瞬間だった。

男の背後から、声が聞こえてきたのだ。

「残念だが、そのトランクケースは返してもらおうか」

男は後ろへと振り返る。

そこには、まだ幼さが抜けきっていない、漆黒のコートに包まれた
少年が立っていた。

ボクは体のあちこちに汚いゴミがついた男を見る。

手には“例の物”を持っていた。

組織から、どうやって盗み出したかはわからないが、あの男が持つているのは間違いなくそれだ。

「……大人しく素直に渡したら、あんたを逃がしてやつてもいい」
ボクは自分の腕を軽く慣らした。

「子供が偉いよつの口を叩く、世の中に変わったか？」

「別にそう思つてくれても構わない。……ケースを渡せ」

「くつーーーーまで盗んでおいて、『はい、そうですか』とあいつ渡せるかって！」

そう言つて、男は空いていた手をボクの方へと向けた。
そして、その刹那に、男の手から炎が放たれた。

(異端者！？)

「 ッ！！」

慌てて交わしたが、右肩から腕まで、服が炎で溶けてしまった。
右肩を抑えながら、ボクは男へと目を向けた。

「どうだ？ 熱いか？ これが俺の異端能力“炎舞”だ

男はボクを見て、歪んだ笑いをする。

ボクの最も気に食わない、そんな顔をしている。

「これが……アンタの答えか？」

「ああ、俺はお前みたいなガキにケースを渡しはしないし、負けも
しねえ。悪いが……お前にほこりで死んでもらうぜー！

「……そうか」

ボクはもつ語るまこと両手を添える。

ボクがそう言い終えた後に、地面から長い槍が出現した。
いや…、「出現した」よりは「地面が槍へと変わった」と言つた方が正しい。

手前の地面は「」つそりと何かが持つていかれたような、大きな穴ができるでいて、男はそれに驚愕していた。
ボクはその槍を掴み、男の方へと突きつけるように構える。

「お、お前も異端者だつたのか…？　そ…それにその能力はまさか……？」

「紹介するのが遅れたな…。」これがボクの能力“誓約誓誕”だ

「…誓約…誓…誕…つ…？」

男は後退しながら、再びボクへと手を向けた。

「そ、それがどうしたってんだ！　俺の炎の方が強いんだつ！」

「

そう叫びながら、手からさつきよりも大きさが増した炎が繰り出された。
ボクはその炎を槍で振り払つていく。

「なつ！……俺の炎が……消えていく……」

槍の一振り、一振りが炎を書き消していくのに男は驚きを隠せないようだ。

「……さつき、槍を練成した時に地下水を混ぜて造った。炎には水を……、ボクの“誓約誓誕”はそういう事も可能なんだよ」

「そんなのありかよ！……く、くそ！」

男は何度炎を繰り出しても、ボクはその回数分、槍で振り払い、男との間合いはだんだんと縮まっていく。

男は後ろへと下がろうとするが、背後には壁で道は塞がれており、何かに躡いて、地面へと扱ける。

どうやら……もう終わりのようだ。

ボクを見るその男の顔は……。

ただ迫り来る恐怖に怯える子供のような顔だった。
かつてのボクみたいな……、何かにしがみ付きたい顔を。

「た……頼む！……ケースは渡すから、い……命だけは助けてくれ！」

「……なら、ケースを渡せ」

「ほ、ほらよ！」

ケースを無事に受け取り、中身を見てみた

ケースの中身、例の物は安全だったのを確認する。

「……こちあら、heresy。ケースは無事に取り返した、中身も無事だ」

「……あくせつた。持け出した者は誰だった？」

「……殺したよ」

「確認した。では、heresyは予定の合流地点へと向かってくれ」

「ああ、わかった」

無線機から通信は終わり、槍を元の形に戻した。

そして、ボクは振り返って、男へ向けて呟く

「これでアンタはもう大丈夫だろう。ここからは逃げても構わない」

「……そうか、助かった。本当にな……っ！」

男はそう言つて、立ち上がり、ボクの腕を掴んだ。

そして、何やら赤いモノが腕からあふれ出す。

「馬鹿めつ！…………簡単に騙されやがつて！ お前みたいなガキはあの世で後悔しろっ！！！」

炎は一気に腕を燃やしていく。

快樂を得た笑いをする男はもはや、ボクからしてみれば愚かで仕方なかつた。

だけど、もつと愚かなのはボクなのかもしれない。
だって……ボクはこの時に微かに殺意が芽生えてしまつたから。

だから……

腕に絡んでいた炎はだんだんとかき消されていく……。

男は何が起こったか、分からぬ顔をしていた。

当たり前だ……。

分かるはずもない。

この男にも……、そつ、誰もえも……。

ボクの体自体に“誓約誓誕”が掛けられている事を。

故にボクの体は、人と同じよつて年はとつても、死ねない体になつてしまつた。

そう、ファンタジー小説等で出でくる、不死のドライモンのよつて……。

無傷のボクに対して、男は再び恐怖の顔に陥る。

「そ……そんなん！　ど、どうしてだ？　まともに食らつたはずなのに……」

そんな男の問いなど、無視して流す。

ボクの頭の中には、もう抑えられない殺意の衝動でいっぱいだつた。

「……誓約を誓つ」

ボクはがむしゃらに地面を集め、切れ味の良い日本刀を形成する。そして……、その男の方へと振り上げた。

「ま、まってくれ！！　……わつきのは軽い冗談だ！　悪気はなかつたんだ！　だ、だから　」

男の話等、もうどうでもよかつた。

ボクはそのまま一気に刀を振り下ろした……。

ブショウツ

血が吹き出ると同時に、男の頭は真つ一いつに割れて、首元まで裂けた。

真つ向から、血を浴びたボクは髪の毛から足元まで、全身を血で赤に染められた。

床に大量の血が流れれる。

その血を欲するかのように、ネズミが何処から湧き出て、無惨な死体へと集まつていく。

刀を崩し、ケースを握り締めて、ボクは予定合流地へと向かつた。

顔は返り血の所為か？

何故か……熱く感じれた。

ボクは……。

ボクは……もう、あの頃のボクには戻れない。

血で染まった手は、やがて明るい世界の人々へも害を及ぼしてしま
うから。

でも、キミだけは……。

あの日のキミだけはどんな事をしても、取り戻すから

だから

はーいw

一話をようやく書き終えました！！

桃月です！ d(・・・)

さてさて、今回は戦闘シーンとシリアルスのシーンを入れましたがどうでしたか？

戦闘のシーンの描写はボク、とても苦手なので辛口感想とかあればどしどしそうに言つて欲しいですw(汗) (参考にしまくつまよおつおw w w

(- A、)

さて、なんだか話が逸れてしましましたね (汗)

これはプロローグから一話まで、共通で出てきているのですが、

彼方が言ひ、「彼女」や「キミ」

この人物は3年前、彼方が自分の異端を手に入れると同時に対価として失った人であります。

まあね、この少女の名前はもう決まっているんですけどね~w

セイジのお楽しみで (カーセン www

では、第3話のあとがきでまた会いましょう! -

ヾ (*。 ^*) ノ see you next time !

ボクが予定合流地にたどり着く頃には、もう時間は1~2の針を回っていた。

予定合流地……下鴨公園には既に組織の者が数人、彼女等の背後には大きなへりが用意されている。

どうやら、ボクが来るのを待っていたようだ。

ボクはケースを手に、組織の者達へと近づく。

そして、依頼の度によく顔を合わせる馴染んだ金髪の女性へと話しかけた。

「……ケースはこの通り、無事だ。一応、中身も確認してくれれば助かるんだが」

「わかりました」

「……どうだ？ ちゃんとそれがアンタ達の物がどうか確かめてくれよ」

「これで間違いないです。では、契約金を

そう言つて、へりから別のケースを持ってきた男が女性へと渡した。

「どうぞ、フェルナさん

「…ありがとうございます」

フェルナと呼ばれた女性はボクへとケースごと渡した。

ボクはそのケースに入っている金額を確認する。

この人はフェルナ・シュタルツド
まだ、年も若いのに組織の幹部の彼女は、こういった汚れ仕事を組織に任せている。

彼女の経歴は不明だが、彼女も異端能力者の中の一人だ。
能力は不明だが、数ある危険な任務を任せられて、そして100%の確立で成功させると言われている。

組織にとつては、差し詰め“戦場の女神”的な存在だろう。
そして、毎回厄介な事をボクに依頼してくるというボクにとつては迷惑だけの女性だ。（ただし、彼女の方は何故かわからないが、僕の事を気にいっているらしい……）

ボクとしては、あまり関わりたくないのだが、こっちは雇われの身なのでどうしようもない。

「よく依頼した通りの活躍をしてくれます。……流石ですね」

「それはボクに対する褒め言葉……と素直に受け止めていいのかな？」

「ええ、私はそっちの意味で言いました」

本当に何かと固い人だ……。

さつき、人を殺したばかりなのに、この女性といふと脣間の自分を思い出しても他ならない。

「それでは、私達はこれで失礼します」

「…ああ」

「では、また何かあつたら、お呼びします」

そう言つて、彼女とその部下達はヘリへと乗つた。
ボクはヘリが離陸するのをじつと見つめていた。

ボクと組織……“ベラロッテ”（これが組織の正式な名前だ）との

関係は傭兵とその依頼主。

ただ、そこらの雇われた兵とは違い、ボクは組織専属の雇われた兵だ。

だが、専属の雇われた兵というのは結構不便なモノで、好きに雇い主を選べないのが最大のネックだ。

そこに組織が「高額な報酬」と「ブラッドロードの最新情報」をボクに提供するという提案を出したのだ。

ブラッドロードの情報に関しては、ボクにとつては思っていた以上に貴重な事だつた。

そのデータを解析し、失ったモノを取り返すために…。

ボクは何の迷いもなく、この組織の専属兵となつた。

だつて誓つたから。

あの日の自分に……。

絶対に彼女を取り戻すと。

懐かしい花畠に壮大な星空。

まさしくあの時の光景だった

だけど、ボクはあの時よりも随分と成長している。

「 久しぶりだね」

ボクへ声を掛ける彼女を見つめ、傍に駆け寄った。

彼女の姿は、まったくあの時と変わっていない
ただ、表情はとても寂しそうな顔をしていて……。

だから、ボクはそんな彼女に何かできないかと、彼女の腕を引っ張つて、花畠を走りまわった。

息が切れる程に……、そう、笑いながら彼女と

僕達は疲れきったので、花畠へと寝転んだ。

その花畠は夏にぴったりな向日葵で満たされていた。

彼女が傍にいるだけでボクにとつては幸せだ。

でも……彼女は？

嫌な衝動に駆られて、ボクは彼女へと質問をする。

「ねえ、キミは楽しい？」

彼女はボクの問いに頭を縦に振った。
でも……。

その顔にはまだ寂しさが抜けきっていないくて、何か……何かが足らないとそう感じた。

あれ……？

確かに前にもこんな光景をどこかで……。

そもそも、なんでボクは“この光景を知っていたんだろう？”
だいたい、“あの時の光景”ってなんだ？

全て、初めて……なはずだ。

なのに、どうして？

頭の中で幾つもの思考が交錯する。

だが、そんな時間の余裕をとえてはくれなかつた。
誰が？ 何が？

『さう、この忌まわしい線が……。』

……線？

そういうえば、ボクと彼女を分け隔てるかのように線は引かれている。

なんだ……、この異様な不吉な予感は……。
体中が……熱い。

(なんだ、これ?)

ダメだ。何かを思い出そうとしても頭がズキズキと痛み出し、もうそれどころではない。

そういえば……彼女は?

彼女がわざわざいた方向へと目を向けた。

そこには、息苦しそうに花畠へと倒れていた彼女が……。

彼女の名前を言おうとしても、この頭痛と体の熱さで阻まれて、口にする事ができない。

くそ……、くそおつ……

気づくと、よろよろとした動きでボクは彼女の方へと向かっていた。夢中だった。彼女が心配で……、ボクがしっかりしなきや……。
もうすぐだ。

後一步……たつたそれだけの距離で彼女を抱きかかえる事ができる。ボクは最後の力を振り絞つて、彼女の倒れた距離へとたどり着いた。そして、傍へと一気に座り込む。

「おい、おい! 田をあけてくれ!..」

声を出せるくらいには頭痛も回復していく、はっきりと映った視界で彼女を見る。

だけど、ボクの声はまったく聞こえていないのか、彼女は一行に目を開けてくれない。
それどころか……。

「 体が透き通っている!..」

彼女の体はだんだんと薄明へと変わっていく。

そんな……。

なんなんだ、これは……。

彼女が……、一体何をしたって言つんだ?

ボクだつて何もしていないのに

『本当にそうか?』

ボクに疑問の槍が突き刺さる。

だつて、ボクはただ彼女の傍にいただけで

『なら、どうして彼女を守れなかつた?』

それはボクの弱さを証明するに等しかつた。

抱きかかえた彼女の姿は、もう形を整えるのが精一杯な様子だ。

「い……や……だ……。頼む……、消えないでくれ……!」

ボクの叫びもまったくの無意味で、彼女が消えていくのはまったく止まらない。

悲観に暮れていた時……。

彼女が力を振り絞つて、何かをボクに伝えようとしている事に気づいた。

口をパクパクと動かして、擦れた声でボクへと…。

一文字動かす度に、消えていく彼女をボクは必死で見守る。

そして、最後の文字を言い終えたと共に、抱えていた体がボクの体ごと透き通った。

もう、触れる事すらできない…。

ボクは悔しい思いでいっぱいになり、目線を逸らして、ひたすら涙を流した。

その一瞬だった。

目を戻すと……彼女はもうそこにはいなかつた。

周りを見渡すも……、誰もいない。

嘘だ……。

こんなのは……夢に決まっている！

『本当にそうか？』

黙れ！ ボクにとって彼女はたった一人の大切な人だつたんだ！
それなのに……。

なんで……、どうして？

誰にもわからない疑問を自分自身にぶつけながら、彼女が最後にボクに伝えたメッセージを思い出す。

大好きだよ

「く…、うわああああああああああああああ…！」

泣き叫びと同時にボクは夢から一気に覚めた。
顔は涙で濡れていって、夢だと呟つのにさつきまでの感覚が、今でも
リアルに感じれた…。

「……夢……か？　なんで……なんでまたあの夢を……」

「最近、同じ夢ばかりを見る。
あの3年前の夢を……。」

「うつてなんだ。」

「うつて、また……。」

眩しい光に照らされて、ボクは布団から出た。

そして、嫌にべた付いた汗を洗い流して、部屋の窓を全開にした。

e ぬ 悪夢（後書き）

さて、今更つ もう話も書き終えました。

今回の見所は彼方がリフレインしている所です。

まあ簡単に言つと最悪の出来事を再現してしまつた…。みたいな感じですね。

でも、あくまで彼の夢の中の出来事だったのでそこは少し内容を変えてみました。

ボク個人では彼方に想われている少女が「 大好き 」 と言つシーンが自分で、書いていて一番心に應えました…。

ええ、なんか悲しい物語を書いてしまつています、桃月です。（汗）

てか、なんか今回真面目に答えすぎましたね wwwwww (気づくの遅いわ)

(、 、 、)

では、4話のあとがきで、また！

ヾ (*。^*)ノ see you next time !

「ふう……」

登校途中の見慣れた風景。

ボクは今、藍口の家まで迎えに来ていた。

もちろん、一緒に登校するためだ。

どうこう訳か、藍口とボクは入学当初から、一緒に登校している。まあ、クラスメイトの中でも、一番仲のいい友達が藍口なので、ボクとしても一緒に登校できて楽しかった。

ボクは軽くインターфонを一回鳴らした。

それに出でてくれたのは、活気が良さそうな男性の声……、藍口のお父さんだ。

「…方枷です。藍口さんを迎えてきました」

「おっ、毎日すまないね。方枷君」

「いえ…、ボクがいつも一緒に登校させてもらつてこるのは

「ありがとう。少し待つていてくれるかな?」

「ええ、わかりました」

「おーい、碧く！ 方枷君が来てくれたぞー！」

「

藍口のお父さんが、急かすよつて言ひ。
それに対してもうとこいつと……。

「えつ！ ちよつと待つてえー！」

わざから数えたら、3回は軽くもいつたな。

（相変わらず、朝には弱い奴だな…）

インターフォン越しで会話する親子に、クスクスと笑ってしまう。
すぐ仲の良い人達だ…。

一人暮らしなボクにとっては、それがとても羨ましい事だった。

玄関のドアが開き、ボクは髪の毛が少し跳ねた美少女へと挨拶をかける。

「おはよう、藍口」

「お…おはよーーー！」

「……髪の毛、跳ねてるよ?」

「えー? 嘘ー?」

藍口はさつまつて、カバンからコンパクトなサイズの鏡を出した。

「……うー、ほんとだあー」

「ふツ……、ドンマイ」

「もう笑わないでおーーー。しかも、ドンマイじやないよおーーー!」

昨日と同じような腫れた顔になり、またボクの頭をポカポカと。しかも、昨日よりも少し強く叩いているかも。

「ゴメン、ゴメン! 痛いって……」

「むうー! 方枷君のばかあー!」

あ、また力が強くなつた……。

「やつそりー藍口」

ボクは藍口の攻撃から切り抜けるために、別の話題を引き出す。

「ボク達のクラスは喫茶店をするんだ?」

「私達のクラスは喫茶店をするんだよ」

「へえ~。もう役割とか決まってるのか?」

「方枷君はもう決まってるよ~」

「おー! 何々?」

藍口は一タマと笑みを浮かべて、ボクの方へと顔を向ける。

「女装ウーハイトレス」

「.....」

えーと...。気のせいかな?

藍口はウヒイトレスの前に女装って言つたように見えたんだけど。

女装ってあれだよね、女性の格好に成りますって事の.....。

「あ、嫌なら、もう一つ。女装「シックさん」

「あのー、... 藍口さん。」

何故に女装のシック?

シックって別に女装なんてしなくてもできるんじゃないのかな?
しかも、どうしてボクの選択肢は女装しか残されていないの?
これって理不尽にも程がある.....っていうか、理不尽だらけじゃん!」

「あのや…、悪いけど、ボクは別の役割を希望するよ」

「ええ～！ もう決まっているのに～！ むう～！」

藍口はやうやく言つて、わざとまで止めていた攻撃を再開し始める。

ああ…、痛い。

これ、ホントに結構痛いんだよ…。

「……はあ～。今日も一日、大変だ」

空を見上げて、肩を下ろし、ボクは嘆息をした。

「やつとだ…。やつと君を見つけたよ」

とても、男性とは思えない程の綺麗な顔立ちの男がモニターに映った少年を見て、笑う。

その笑みはとても人間のモノとは思えず、獣が獲物を見つけたような顔をしていた。

男の身の周りには死体の山と大量の血で飾られていた。

死体の顔は狂気に引きつっていて、残酷としか言いようが無かつた。

男は死体に突き刺さった刀を抜いて、刀にこびり付いた血をなぞる様に舐める。

「ああ～、1年と3ヶ月ぶりだねえ～。この前は、炎舞の者がお世話になつたね。『めんねえ～』

男の口の言葉は少年へと向けられているのだろう。

そして、刀を腰に付属した鞘へと戻し、惨殺された部屋を出る。ドアの壁横には男が会いたがっている少年が属する組織、ベラロッテのエンブレムと「heresy」と書かれたプレートが掛けられていた。

ああ、なんて素晴らしい口になるんだろう。

男はそう思いながら、狂気へと満ち溢れていた。

「早く会いたいなあ、『カ・ナ・タ』」

既に時間は12時を回っていて、午前の授業もこれで終わりだ。もちろんけど、ボクは授業を放棄して、寝ています。

理由はこうだ。“眠たいから”

あまりにも馬鹿だとは思つたが、自分欲求には素直に生やせないや
ね！

そう開き直りながら、ぐつすつと眠つてゐるボクに背筋が凍る感覚
がいきなり襲つた。

「ツー？」

なんだ……！

ボクはこの感覚がなんなのかは説明できなかつた。わからない。
上手くは言えないのだが、いつ……なんなのだろうか……。
嫌な悪寒……とでもいうべきか？

本当に自分でも訳がわからない。

多分、そこまで気にしなくともいいような事なの……。
例えて言えば、そう……。

まるで、 “何処か遠くから、誰かに見られていた” 感じだ。
その感覚のせいでボクははつきりと目を覚ましてしまつ。
席の隣では藍口が心配そうにボクを見ていた。

「なんか顔汗だらけだよ？」

「うめん、ちょっと熱っぽいかも……？」

「…………」

藍口が黙り込み、そして……何かを考え終えたのか、前で教科書を
読んでいた先生に話しかける。

「先生、方枷君が少し熱っぽいので、私…保健室に連れて行つてもいいですか？」

「えつ…、藍口？」

ボクは藍口を見つめる。

呆然とするボクに対して、藍口はいつもとは真剣な顔で先生を見ていた。

「…わかりました。では、藍口さん。方枷君をお願いね」

「はい！ ありがとうございます」

そして、ボクの肩を担ぐみたいな感じで、ボクと藍口は教室を出て、一階にある保健室へと向かった

「本当に大丈夫？」

藍口はベッドに横たわるボクを見て、心配している。

藍口の顔は少し涙ぐんでいて、本当にボクを心配してくれているのが、否応にもわかった。

別に熱くもないのに、汗がビリしても出てしまう。

ボクは汗ばんでいたシャツの第一、第一ボタンを開けて、ぐつたりと襟葉を返した。

「……うん。まだ、……少しでもいいから、たいした事じゃないと思ひ」

「……良かつたあー！」

「それよつも、ボクにつき合わせて『メンな……』

別にそこまで、たいした事じゃなこと言ひの上藍口を保健室まで連れまわして……。

本当にボクは何をやつているんだか……。

「ううん……その……方枷君が無事だつたし。だから、いいよ……」

藍口はわざわざの顔から一変して、今度は赤くなっている。ん？ ビリして藍口の顔が赤くなっているんだ？

(「こつも熱っぽいのかな……？」)

ボクはやつ思いながら、藍口の額に少し汗ばむ手を添えてみた。

「あ……！」

手を当てた途端、彼女の顔は見る見る内に赤く上気していく。

「フシコ～～！」

頭から、何やら湯気（？）みたいなモノまで出てきている。
つて、普通人から湯気なんて出ないぞ。

うーん…。藍口 碧、……未だに謎めいた奴だ。

「んー……」

そしてどうやら、今のボクの体温よりも藍口の方が熱く感じるのは
『氣のせ』……ではなさそうだ。

「藍口、お前の方こそ保健室で休んだ方が良さそうだぞ？」

「あ……、いや、……私は教室に戻るよつ……」

「そ……そつか？まあ、それなら別にいいんだけど……」

「じ、じゃあね！あ、何かお昼食べたい物あつたら、携帯で教えてね！買つてくれるから」

そう言つて、藍口は保健室から出よつと……。

「ゴシンッ！

あつ、今頭…壁に打つた。

見事に壁をドアと間違えて、藍口は頭を激しく打つていた。
その抑え方からして、少しオーバーだったけど、結構痛そうだな…
あれ。

「大丈夫か～？」

「だ、大丈夫ですう～！」

そう言つて、ドアに手を掛けようとして…。

今度は床に滑つて、藍口の腹部が床と衝突した。
さつきのよりも、こっちの方が遥かに痛そうだ。

「ひへへへ..

「おーい…。本当に大丈夫なのか～？」

「う……、うん！」

藍口……。

残念なんだけど、今日からボクは、キミを「デジ娘」として認識するよ、うん。

さつきまで頼りがいのあつた彼女が、一気に正反対へと豹変したのを見てボクは、「見事な程のドジ娘だ！」と思つばかりであつた。

ep4 ハプニングな午前（後書き）

さてさて、今回の4話では見事に桃月の悪ふざけが展開されていましたねw（えww

前回が少し、暗かつたので今回は碧ちゃんに一役買つてもらいまし
たよー！

ムフフツ www!（うえうえww

さて、気になる点はと言いますと…。

真ん中辺りで、彼方に会いたがっていた男。
実は彼、一度昔に彼方と戦つて、互角に渡り合つた人でもあります。
でも、彼方に重症を負わされて、一年以上の年月を隠れて過ごして
いました。。（てかそういう設定ねwww（ぶはw）

さて、いよいよですね！

この桃月の妄想ワールドが暴走するのは…?（えwww

では、次回のあとがきでまた会いましょう！

ヾ(*。^*)ノ see you next time !

PS、この作品、初投降の日で50人を超えてくれました。桃月は
かなり喜んでたりしています！（・・・）

これも読者の皆さんのおかげです、ありがとうございます！

ヤバイ……ヤバイよ……。

まだ、顔が熱い。

私は方枷君を置いて、保健室を後にしていた。
方枷君は私の気持ちに気づいていないようで、良かつたけど……。

でも逆に言つと、彼のその鈍感さが欠点だとも言える。

私から見れば、容姿はカッコいい方だと思うし、背だつて十分なく
らい高い。（確かに、この前に身長は172cmあるつて本人が言つ
ていたつけ……？）

スポーツもできるし、勉強の方に関しては天才を發揮している。

でも……。

私が好きなのは彼のそんな部分じゃない。

まあ、多少は外見も好みなので、少しほんになつてしまつただが……。
それでも、私が方枷君を好きになつたのは、彼の何気ない優しい性
格に惹かれたからだと思う。

神代学園に入学した当初、この街に引っ越してきた私は友達なんていなくて、本当に心細かったのを今でも覚えている。

入学式が終わった後、新入生は自分達のクラスが発表されるのを確認しなければいけないので、体育館に残つていなければならなかつた。

知り合いもいない私は、一人で早く自分のクラスが発表されないかと待ち焦がれていた。

「おい！ 見るよ！ あの子すっげー可愛いなー！」

「ああ！ 何組なんだろー？」

「うーん。あんな女の子みたいな彼女欲しいな……！」

何本もの視線が私に向けられる。

向こうはひそひそと話しているつもりだと想つのだが、こっちには丸聞こえだ。

私は別に目立ったくなんかないのに……。

うんざりしてしまう。

どうして男の人って…女性を顔だけで判断してしまうんだろう？

私なんか、容姿を覗いてしまえば、ただの何もない少女だと言つのに……。

< … B組、藍口 碧さん。 >

私の名前が呼ばれ、私はBの担任の女性先生の方へと移動していく。先生の前に並んでいた男子生徒の後ろへと座り込んだ。

この前に並んでいた生徒が…後に私にとつて、かけがえのない人になるとは、この時の私には思つてもみなかつた。

新入生クラス発表が終わり、各生徒達は自分のクラスへと向かっていく。

私はBの札が張られていたクラスへと移動した。

そして、自分のクラスの前まで来たところで、足止めて窓からクラスを覗いてみる。

クラス内は結構賑やかで、楽しそうだった。

中には私みたいに、一人ぼっちに席に座っていた女の子もいたけど、数人の男女がその子に近寄って、話を混ぜてあげていたりしていた。それを見て……安心できた。

何に安心したのかは……多分“イジメられる”という概念が自分の頭のどこかに存在していたからだと思う。

私の容姿は何かと同性の人達にとつてはやっかいなものだった。

前に、住んでいた町の中学校に通つていたときも、この自分の容姿が気に食わない連中から、軽いイジメを受けた事があった。

その時に、私は初めて人に恐怖を感じた。

純粋に「怖い」……と。

……だけど、このクラスなら安心できそうだ。

私はそれを見て、そう思い……。

そして、教室内へと足を運ばせた。

教室へと入つてきた私に教室にいた全ての生徒が私に目線を向ける。ビクッとしたが、私は平常心を保つて、自分の名前が書かれた席へと座る。

さつきの女の子みたいに、私も席にじつと座つていれば、だれかが声を掛けてくれる。

そんな甘い考え方に入つていた私は、その時が来るのをじつと待つていた。

……だけど、なかなか誰も話しかけてはくれない。

どうして……？

さつきの女の子を見てみる。

その子はさつきとは違い、もう他のクラスメイトと打ち解けていた。
それに比べて、私は……。

多数の視線は感じるものの、未だ誰からも話しかけられていない。

「……う

ヤバイ……。

自身の目から、涙がこぼれるのをひたすらこられる私。
だけど、もうそんなに長くは持たない。

だって、既に一滴……。

頬に涙が伝つてしまつたから。

そんな時だつた。

新たに教室に入つてきた男の子が私の隣に座つてきたのだ。
確か……あの容姿はクラス発表の際に私の前に並んでいた生徒とまつたく同じだつた。

その男子生徒が私に話しかけてきた。

「 キミ、名前は？」

「 ふえ……？」

泣きそだつた顔をあげて、私はその少年を見た。
窓からの太陽の光に包まれて、光つて見える。

「あ……私……」

まともに喋れていない私を彼は笑った。

「そんなに焦らなくても大丈夫だよ」

「あ……その……」めんなり

「いいよ、いいよ。…そうだ、キミは地元の子っ。」

「……ううん。私、引っ越してきたから……友達とかそういうのいな
くて……」

「そうなんだ。……なら、ボクと同じだね」

「え……？」

彼は少し悲しい顔して、私を見つめた。

私の胸がドキッとする……。心臓はバクバクと速さを増してきて、
もう抑えられなかつた。

彼の……私を見つめてくるその赤い瞳に、私は吸い込まれそうなくら
い魅入つていた。

「あ、私の名前は……、藍口 鶴」

「 むいじべ。 藍口さん」

そして、立て続けに少年は言つ。

「 ボクの名前は

」

多分、この時から……。

この時から、彼に惹かれていたと思つ。

ちゃんとした理由なんて、多分ない。

だけど……。

この気持ちは本当だから……。

だから……。

彼方……。 方枷

彼方。

さすがにあの時から、お互いの性格は随分と言ひ程でもないが、変わってしまったと思う。

私は少々活発になつて皆とも仲良くなつたし、彼の方は初めの言葉の丁寧さが抜けて、今ではすっかり私の事を「藍口」と呼び捨てだし……。

でも、お互い根っここの部分は変わっていないと思つ。だって、『彼方』の優しさは今でも十分に感じるから……。

私は後ろへと振り返る。

そこはさつきまで二人がいた保健室。

「早く元気になれよ！ バーカッ！」

そこはまさに田で、一番幸せに笑つて いる私がいた。

えーとですねwww。ー。)

この4・5の話はまったく本編と関係ないんですけど……入れちゃいましたw! (汗)

まあ、碧ちゃん視点での番外編と受け取ってくださいwww

ええ、ホント。。。

恋する女性つてのは本当に輝かしく見えますよね~ w~ (うわうわw

さて、次回はep5なんんですけど。。。

少しこじこじで、物語を進めなきゃね~と書いています。

まあ、今ちんたらやつているんですね… (汗)

(- A、) 。

では、また次回のあとがきで会いましょう!

バ (*。 < *) ノ see you next time !

保健室へと運ばれてから、だいたい20分～30分くらいたつていた。

もう、4時間目は終わっているだろう。
体がようやく落ち着いてきたので、ボクはベッドから立ち上がる。
まだ少し、体はクラつとするが、汗は止んで十分に動ける状態となつた。

「一体、何だつたんだ？」

実に不可解な事だつた。

ついさっきの……あの背筋が凍るような視線。

最初はボクを狙つてきた異端能力者とは思つていたが、気配は感じなかつた。

だからこそだ……。余計には訳がわからなかつた。

こんな感覚は、前にも一度あつた。

ボクが……“ヤツ”と初めて戦つた時、その時も同じような感覚をしていた。

だけど、“ヤツ”は俺がこの手で殺したはずだ。

なら……この不快感は一体？

ボクはその事を頭から振り払つよつて、昼飯を買おうと食堂へと向かつた。

食堂には藍口が、いつもボクが座つている席をキープしていた。食堂で買ったラーメンを片手に持つて、ボクはそっちはと向かう。

「ボクのためにごへりうつ様だなー。」

「あー！ 方枷君、もう大丈夫なのー？」

「ああ、だいぶ収まつたみたいだしね。ありがと、藍口」

「う、……うん」

そう言つて、藍口はまた顔を赤らめる。

ボクの事はおいといて、今日の彼女は本当に…… 一体どうしたのだろうつか？

何か変な物でも食べたのか？

はたまた、さつき頭を打つておかしくなり始めたのか？（そんな事

はまざあつえないのだが……）

まあ、詳細はあまり気にしなくていいな！ うん。

「わい、お腹も空いたし、食べるか！」

「うんー、あ、かまぼこ発見ー、頂きー」

やつぱり、ラーメンに綺麗に飾られていたかまぼこを箸で掴んだ
藍口。

そして、それを一気に口へと入れてしまつ。

ああ……楽しみこしていたラーメンが……、かまぼこが……。

「うわ……ボクの……ボクのかまぼこちゃんがあー……」

「これドカツのチャラだ許してあげるよー」

「はあー……」

「何？ そのため息は」

「別になんでもないよ……」

「なんか、方枷君そんなど……私が悪いみたいだね」

つて、実際にキミがボクのかまぼこを盗つたからじゃないか！

誰もいない心の中で、そつ突つ込みながら、ラーメンを啜る。

けど、藍口にはせりき助けてもらつたので、文句は言えない……。

「むう～。なう……」れあざるよ。あ……あーんして?」

藍口は手に持つていたおにぎりをわざつて、ボクの方へと持つてきた。

何故だか、また顔を赤らめて、今度は恥ずかしそうにしている。

「『あーん』……つて、自分で食べれるよ」

「むう～！ ほ、ほう……あーん」

むー、いやつ、意外とじつにな……。

「仕方ない……」と心づかいで、ボクは口を開けようとした時に

「…………クッ！」

また、さつさ授業中で起こうとした時と同じ感覚がボクを襲った。

確定はできないが、何処かで誰かに、見つめられていながらの気がある。

汗はもう出ないが、以前よりももっと酷く感じてしまう。

同時に、さつさまでは出でていなかつた異端者の気配がする。

距離は…………近い！

「…………じめん、藍口ー…………ちよつとまた保健室行つてくる

藍口が残念そうな顔と心配そうな顔を同時に浮かべる。

「う…………うん。あんまり無理しないでね。」

「ああ。五時間目には戻るよ。さあ行くよ。」

最後の一 口を食べて、藍口を食堂に残し、ボクは走る。

異端の気配がした“屋上”の方へと……。

屋上の扉に手を掛けて、ボクはドアを押す。

そこから映つた景色は綺麗で、この町の半分くらいは眺める事ができそうだった。

そして、その視界の中には一人の男がいた……。

もう春が終わつて夏に入ると書つのに、凄く暑そうな赤いロングコートを身に纏つている。

紫色の長髪が風に靡いて、横顔がチラリと見えた。

「なんで……！？」

ボクは驚愕する。

その男はボクの記憶に深く印象に残つた顔をしていた。
思考が停止する。

アイツは、死んだはずだ……。

そ、ボクがこの手で殺した。

なのに……なの?、どうして此処にいるんだ……?

「やあ、カナタ! 会いたかったよー!」

「ゼル……。どうして……お前が……」

「死んだと思ってた?」

「うーー。」

「あはははー、図星かな?」

薄気味悪い笑い方をして、ボクを見ていた。
ボクはそれを見つめ返して、距離を置く。

「まあ、確かに僕はキミに殺されて死んだよ。…だけど、ボクは戻ってきた。地獄の底から、キミに会うためにねー。」

その言葉を聞き、ボクは誓約誓誕を発動させ、屋上のコンクリートの床を素材にした刀を作つて、構える。

「やだなー！ 僕は“まだ”キミと戦つつもりなんてないよ

「…………」

「怖い、怖い！ でも、そんなカナタの顔もいいね～」

「黙れ！」

直後、僕はゼルへと切りかかった。

大きく刀を構えて、そのまま目標へとなぎ払つよう……。

。バタリ…

刀がゼルの頬から先に動かなくなる。

目線を追つて見てみるとゼルはボクが振るつた刀を素手で受け止めていたのだ。

ボクがそれを離そうとしても刀はビクリとも動かない。

なんて力だ……。

前と戦つた時よりも強さが増していく……。

「血が上りすぎて、誓約誓誕の力を上手く活用してないね。そんな感じや、僕には到底勝てないよ？」

「……なんだと！？」

ボクは挑発を受け、頭にきた。

セルに受け止められていた刀をそのまま鎖へと変化させ、ボケは鎖を握り締め、ゼルへと巻きつけるようになげる。
その鎖は蛇のようにゼルの体へと巻きついていった。

「うわー！…」これは不覚にもやられただよー。」

明らかに優勢になつたボクに対しても、ゼルはまだ余裕のありそうな顔をする。

（何なんだ……。）いつの余裕のある顔は……）

ボクはより力をこめて、鎖を引く。

ギー・ジと繋られて普通なら体かたきれるかと思へば少し痛いはずだ。

なのに……。

「ああ～！ カナタ……、僕に対する想いがじわじわと伝わるよ」

等と、ふざけた事をまだぬかしている。

強くなつていぐ鎖の縛りに対し、ゼルには余裕ある顔が残つている。

ゼルは楽しそうにいつづく。

ボクにとつてはこの上なく不愉快な事を……。

「今も“あの男”に囚われているのかな?」

「…………」

「せつなんだね。せつかく、僕がこの手での男を殺してあげたのに

その顔葉はボクを殺意に満ち溢れるのに十分だった。

「つー、ゼルーー！」

ゼルの口から、「あの男」と出て、ボクはむき出した田でゼルを睨む。

あの男とはボクのかつての相棒“だつた”男の事だ。

ボクはこいつの狂氣から……相棒を救えなかつた。

そんな過去があるのに……。

こいつは平然とさうりと言つたのだ。

しかも、こいつは喜んでいる。相棒を殺せた事に対しても……。

鎮に絡みつき、捕らえている男に、激しい怒りと憎悪が沸いてくる。

だけど、ゼルの笑みは崩れない。

ボク達はそのまま、お互いの顔を見つめ、睨み合つた。

この時点でボクはゼルを殺しておけばよかった。

今でもこの事で後悔している。

躊躇も迷いもなかったのに、殺せなかつたのは『も知らぬ『恐怖』があつたから。

だけど、それは言い訳に過ぎないのだ。

結果は最悪の惨劇へと変貌してしまつ。

だつて、またあの時と同じよつこ……。

この後、ボクは多大な犠牲をこいつに払つてしまつ。

ep5 狂宴^{くわうえん}前編^{まへん}（後書き）

久しぶりの更新ですねww(汗)
読者の皆様、久しぶりです。

桃月ですww!

今回の話はライバルのゼルを話に絡めていきました。
そして、昔に彼方とゼルの戦つた理由も少し明かされています。

不安な事が一つ!

今回の文章は多分下手に書かれているかもしません(汗)(つい
うか今まで下手だと思いますが……
多分……といふか絶対に手抜きですねww(桃月が手を抜いてすみ
ませんww皆様ww)

(、；；) ホントすみませんww

では次回のあとがきでまた会いましょう

ヾ(*。^*)ノ see you next time!!

方枷 彼方の誓約誓誕には誓約と誓誕の法則に従つて、発動できる。

物理法則に従つたモノをその物質に誓約をかけて、違うモノへと交換させる事ができる。（従つて、生物等には誓約をかける事ができない。）

誓誕させるモノは自由だが、物質の質量に従つたためにその物質では誓誕できないモノもある。

所有者が誓約を解かないがぎり、誓誕させたモノは永遠にその形を持続する事ができる。

確認した誓約誓誕の法則は三つである。

他にも、まだ法則が建てられるか、検討している。

方枷 彼方のような能力は異例であり、異端者にはこのような複雑な能力を持つた者は他にいなく、組織は彼を重宝している。

何故、彼だけがこのような複雑な能力を持つたかは、彼のあらゆるデータを調べても答えはでなかつた。

現在は一から調べなおし、ブラッドロードと彼に何か共通点がないか、探している。

なお、これは異端者の話になるが…

2005年、某国の異端者が突如、異端能力を発動できなくなり、異端者から一般人に戻つた。

これは各国で内密に調べられたのだが、その異端者は、当時大切だつたペットが、異端能力を失う前日に戻ってきていた。（これについては未だに詳細は不明）

その年の一年後にも違う国で同じような現象が見られている。

これによつて、ある法則が建てられる。

“異端能力を得る代わりの代償が異端者に戻ってきた時”、異端能力は失つてしまつ。

あるいは、“能力自体は失つていなくても、発動できなくなる”。

「異端者の代償が戻る」については、謎に包まれている。

この件については積極的に調べられるだろう。

組織は今後、方枷　彼方を……

heresyを観察し、その研究に取り組む方針と見ていく。

e p5 . 5 研究レポート(1) (後書き)

また、難しい設定をしてしまった…… (汗)

そう思いながら、執筆しています、桃月です www

(怒、・・) オイオイ

さて、今回はあえて何も言いません。 (てかネタ切れ? w

まあ、この内容には触れないでおじつと……

さて、後編の方ですが、また少し執筆が遅れますね www (はい w
すみません www)

感想等の意見も参考に取り入れながら、丁寧に執筆したいので(それでも下手クソなんですけど(汗))すみませんが、そこは許してやつてください www (まあ、執筆時間がないのが原因ですね w

では、次回の後編でまた会いましょうー。

バ (*。 < *) ノ see you next time !!

「なあ、彼方。お前の戦う理由ってなんだ?」

少年は笑いながら、ボクへと話しかける。

「そうだな……。大切な人を取り返したい……からかな?」

「そつか。俺とは戦う理由、違うな」

そう言うと、地面に座っていたボクに手を伸ばす。ボクはその手を掴み、起こしてもらつた。

「……翼はなんだ?」

「俺か? ……俺はな

ボクはゼルを捕らえながら、今ではもう懐かしい記憶に浸っていた。
相棒と共に戦った日々を……。

「どうして……翼を殺した？」

「どうしてって言われてもね。カナタの傍にいたからだよ

「アッシュを……殺す事なんかなかつた！」

「ククッ……。アハハハハッ！」

ゼルが突然笑い出す。

「カナタの強さを奪つたのはあの男なんだよ？ 生かしておけない
じゃないかー！」

「ボクの強さ……？」

「そうだよ。カナタの孤独、この世界を恨む意志、最高じゃないか～！」

確かに、コイツの言つ通り。

彼女を失くしていた時のボクは孤独で……生きてきた。世界を……恨んでいた。

……いや、多分今も恨んでいる。

何故、自分を異端者にしたのか？ 何故、彼女を代償にしたのか？ 理不尽だらけの世界だ……と。

「ああ……確かに今もこの世界を恨んでいるよ。ビリして、こんなに勝手な事ばかり起きるのかって。だけど」

ボクは狂つている顔をした男へとはつせつと語った。

「それだけじゃない事もボクは知つている……」

「その台詞をカナタが言つのかい？ セリフまで殺氣ムキ出しだったのに？」

「…………」

「やっぱり、カナタには光は似合わないよ。君は僕と同じ、殺人鬼だ！」

そう言つた直後、ゼルを捕まえていた鎖がだんだんと砕けていく。

そして、その“砕けた”部分がビリビリッと電流でも流れているよう、消滅していった。

ボクはゼルから距離を取り、離れる。

そう、彼も異端者の一人。そして、異端能力が発動されたのだ。

「僕は君に闇へと戻つてもうつために、君の光を全部壊す！――」

ゼルはその言葉を言い放つと同時に腰に刺さっていた鞘から、刀を抜き出した。

抜き出した刀には「千明」と刻まれており、太陽の光で美しく輝いていて、普通なら見とれてしまいそうだ。

その千明をゼルは地面へと突き刺す。ゼルの千明が突き刺さつたと同時にボクの体に無数の雷光が迸つた。あちこちでボクの体に異変が起きる。

動く事が……できない！

「僕の“雷電”、久しぶりに食いつどびつだい？」カナタ

「クソツ……」

どうやら、刀を抜き出した時に刀へと帶電していたようだ
そして、刀を突き刺したと同時に電流でボクを捉えて、ゼルの自慢
の電気を流したのだろう。

（落ち着け。そんな事を悠長に考えているとこひじやないだり）

必死で体を動かそうとしても、言う事を聞いてくれない。
それどころか、ボクの力まで電気で麻痺され、弱まつていいくのを感じる。

電気で麻痺したボクにゼルはこつちへと向かつてくる。
そして、前へときて、ボクの顔を寄せる。

「抜け出せないだろ？ そこで大人しくじつと待つていてね～」

「何を考えている……？」ボクを倒すなら、今がチャンスなはずだ

「僕は元々、カナタと殺りあつつもりなんかないって言つただろ～
？」

「なら、何を

ボクをそう聞き返す前に、ゼルは答えた。

「 これもやつれ言つたよね。 ハハッ……君の光を奪つって

謎めいた事を言い捨て、ゼルは笑いながら、ボクを通り過ぎる。

何が狙いなんだ？

ボクを殺す事じゃなきや……。ボクの光を奪つって……。

そう考えてみて、嫌な結論に至つてしまつ。

その考えはまさに悪夢そのものだ。

「まさか！？」

「ククッ……わかったのかな？ そうだよ。ここにいる人間全員、皆殺しにする

「お前……！」

「だつて、これしかカナタを奪い返せないし。カナタのためを思つて、僕はやるんだよ」

「やめろつ……！」

「無理な事だな）。君にはもう一度闇に還つてもいいためにもね

ボクの体は千明から発している電流のせいで、口を動かすだけでも精一杯だった。

ふと、脳裏に藍口の顔が浮かんだ。

このままだと彼女もゼルに……。

その先を考えず、思考をとめた。

ゼルの声はだんだんと遠くなつて、聞こえてくる。多分、もうアイツはドアの前まで来ているだろう。

どうにかして、ここから抜け出さないと全員が死んでしまう。

「頼む、間に合ってくれー！」

ボクは必死でこの纏わりつく電気から、必死に逃げ出そうと、もがく。

ゼルが起こそうとする、惨劇を回避するために……。

「方枷君、遅いなー」

5時間目には戻るって言つたが、彼は結局その時間帯に戻つてこなかつた。

授業の話は頭に入つてなくて、方枷君の事ばかり考えてしまう。また何かあつたのかな？

そんな事を考えて心配になつてしまつ。別にそこまで心配する必要なんかないはずなのに。

でも、どうしてだろう。

彼が時々、遠くにこいつに感じてしまつ……。

あんなにしんどい的な顔をして、体の方に何かあるのか？ それとも、私には言えない事でもあるかのよつに、何かを隠しているのか？

わからないけど、気になつてしまつ。

知りたい。もっと、方枷君を知りたい。

「うー、藍口さんー 前に出て答えてもらえないかな？」

「えつ？ あ、はい」

私の名前が呼ばれて、思考世界から現実へと戻る。

（考えすぎかな……）

私は教卓へと向かい、問題の答えを書いて、席へと座った。そして、隣に今はいない彼の席を見つめる。本当に何所で何をしているのやう……。

「早く帰つて来ないと、約束破りになるわ……」

そう呟いた時、廊下の方で何やうわわわわと声がしてきた。

「誰だ？　まだ授業中だぞー！」

先生はそう言つて、注意しようとした廊下へと向かう。

先生が扉を開けようとした時、私は嫌な空間に閉じ込められたような感覚がした。

寒気が体中にビコビコと走る。

何だらう……？

さつきとはまた違つた不安でこいつぱーになる。

ダメ……、その扉。

開けちやいけない……！

「先生、ダメっ……！」

気づくと私は、そう叫んでいた。
だが、数コンマで先生は扉を開けてしまった。

そして

扉を開けた瞬間、先生の体が蒼い光に包まれていく。
いや、光と言うよりかは電流みたいに見えるが……。

「ギャアッ！」

いきなり、先生が悲鳴をあげると同時に右足に絡み付いていた電流が消えた。

だが、すぐ後に先生の右足がまた激しく光りだして、消えていく……。

……消える？

……なくなつたの？

「ヒィイイイイイッ……」

悲痛な叫びをあげながら、先生は床へと転んでしまう。教室内にいた生徒達はそれを見て、パニックに陥った。

「キヤアアアアアツ……」

「ア……アアアアアアアアツ！」

私を含めた生徒達一同は一気に悲鳴をあげてしまう。

右足は膝辺りから消え去つていて、その繋ぎ目からはたっぷりと血が……。

周りにあつた机や、その席の生徒達の顔や体にべつとつといでしまつたのだ。

繋がつていた太ももからはたらたらと幾つ物の線が、赤色に染まつ

ていた。

さつきまでの平和だった日常が嘘みたいに壊された光景。
そのグロテスクな光景に私は目を逸らす。

「あ……ああ……」

私は何が起こったかわからなかつた。それは他の人達も同じだらう。また、先生に絡んでいた電流が、今度は周りにいた生徒達へと向かっていく。

今度は無数に分かれ、複数のクラスメイト達が包まれた。

「ウワアッ！」

「ウウ……」

「ギヤッ！」

電流に絡まれた生徒達はさつきと同じよつこ、腕や足などを消されていく。頭が消滅して、死んでしまった子もいた。

「何……これ……？」

「全部……嘘だよね……。」

今起こっている出来事が全部悪い夢だと思ったかった。

だけど、頬についた血からは生ぬるい温かさが伝わってきて、それが現実だと私の希望を覆してしまつ。

残った生徒は私を含めて……4～5人。

あつという間にだつた。

クラスは謎のモノに壊滅されているのだ。

いつの間にか無数の電流は、一つに集まって、形を変化させていく。そして、その電流は人の形を整えた。

蒼に包まれたその形はだんだんと人の肌色へと変わっていく。

そこから現れたのは、一人の少年。見たところ、年齢は私と一緒に思うに思える。

少年は口を開く。

「あつけないな。 ただの人間は本当にツマラナイ……」

そう言つて、手を私達の方へと向けてきた。

その手からは、さつきの電流が放たれて、私以外に残つていた生徒達が捕らえられてしまつ。

「クズ達は処理しなきや！」

そう、微笑んで、少年は開いていた手をギュッと握り締める。

「ガアアアアア！」

私の隣にいた男子生徒が叫びながら、お腹を押さえる。

その押さえていた腹の部分がいきなり膨れ上がり、今度は消滅とは違つて、破裂を起こした。

私のその破裂して飛び散つた男子生徒の血をまともに全身へと浴びてしまふ。

それに呆然と見ていた時に、残つてていた生徒達が、さつきの男子生徒と同じく次々に腹部を破裂して、臓器等が大量にあふれ出てくる。気持ち悪い、グロテスク等の言葉では現状を言い表す事ができなかつた。

「い……や……」

私は血だらけになつた体を、震わせて、体を床に落とす。

「あれ？ 君、運がいいね！ まだ生き残つているなんて

「あ……あ……来ないで……」

「でも、これもカナタのためだから、……死んでね」

「…………カナタ？」

方枷君の名前を聞いて……、私は後悔をしてしまつ。

これから死ぬんだ、私……。

なら、もつと彼に優しくすべきだった……。

もつと見つめたかった。

そして、方枷君に気持ちを……。

「好き」という私の気持ちを伝えたかった。

『サ・ヨ・ナ・ラ』

そう、少年が眩いた後、電流が一直線へと私の方へと向かった。
それを見て、私は目を瞑る。

最後にもつ一度だけ……。

方枷君の顔、見たかったな……。

そう思つて、覚悟を決めた時、私は誰かに抱きかかえられていた。
目を開けると……。

そこには、大好きな彼の顔が心配そうに私を見つめていた。

「おい、藍口！ しつかりしてくれ！ 藍口ーー！」

幻でもいい……。

方枷君の顔を見る事ができて、十分だ……。

もう、上手く精神が保てない私は氣を失つていく。

途切れていく意識の中で、方枷君が私の名前を必死で呼び続けてい
るのが、まだ聞こえてきた。

最近、投稿のスピードが遅くなつてきていますね。（読者の方々、申し訳ないwww）

桃円も、最近は大変なものでw（嘘つけw！

で、後編を書きましたが……。

えーと、むじいですねwはいw

碧ちゃん可哀想すぎますね（汗）

（- A、 ）……。

ていうか設定がだんだんと難しくなり（+ややこしくなつてきてるw）、書くのも少しきついですが、頑張つていかなきやね。

読者さんを裏切らないためにも必死にこいて小説を書く桃円をひどくしたwww（つら

では、次回のあとがきで会いましょう

ヾ(*。<*)ノ see you next time !

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7903b/>

誓約異端

2010年10月17日05時51分発行